

## 見えない敵との戦い・・・今は見えている。

平成24年2月26日

原町中央産婦人科医院

院長 高橋 亨平

苦しんだ、見えない敵との戦い・・・だが今は見えてきている。

3・11の東日本大震災、続いて発生した原発事故に、当時の我々は混乱し、翻弄され、絶望のどん底に突き落とされた。南相馬市では、一瞬にして、社会機能が全て消滅し、一時、約6万人が混乱の中、迷走し避難した。何の具体的な情報も無く、ただ30kmの同心円の中にあるということだけであった。

何も見えない中で、ただ、残った人たちの命を守らねばと奮闘、奮戦した。

早く被曝状況を知る必要があったが、機材も何も無く、見えない中での模索、もがき、だけであった。

直ぐに、東京の同級生、井上外科胃腸科病院院長に電話し、何とか線量計が手に入らないか助けを求めた。混乱の中、直ぐに手配し、苦勞して手に入れた様だが、今度は搬入することが出来なかった。選択肢は1つしかなかった。井上先生に、アズマ・メディカル宛に送ってもらい、アズマの社長が、県庁7回の薬務課に依頼、自衛隊の手を経て、やっと搬入された。3月末には線量計が手に入り、毎日午前と午後、院内と病院周辺を測量し掲示した。その中で鉄筋コンクリート造りの院内は、0.1台で全く安全なことが分かった。

4月には、避難先の妊婦が泣き泣き電話をよこし、どこも分娩を引き受けてくれる病院が無いとのことであった。直ぐに戻ってきなさいと話しし、震災後1件目の分娩となった。南相馬市内の医療は完全に崩壊し、非常事態であった。数少ない、妊婦と子供達を守るべく、地域まるめの線量ではなく、個々の被曝線量を計らねば、何も論ずる事が出来ない。このことから、鎌田実先生のJCFグループと話し合い、そのためにはどんな方法がいいか検討した結果、フィルムバッジという結論に達した。千代田テクノに提供依頼書を直ぐに書き、5月中途から、装着し測量を開始した。年間3、5mSV以下を目標とし、それを越えた者に対して訪問、環境調査、生活指導をすることとした。その結果、5・6月には、年間換算で3、5mSV以上が、33%に認められ、直ちに、妊婦宅の周辺及び屋内の生活空間線量の測量をし、指導開始した。

結果、7月には27%に減少、生活環境を詳細に測量し、指導すれば、年間2-4mSV位下げる事が出来る事が分かった。又、低い人達の環境を調べたところ、その地域全体が低かったり、鉄筋コンクリートのアパートに住んでいた。それでも気になる妊婦の家には、除染を行ない、8月以降12月までは3.5mSV年間推定、以上の妊婦は0%となり下げる事が出来、有効であった。

また、広い土地と森でコストがかかり、除染が困難な妊婦の家には、補助が出るまでの間、一時的に、防線のカーテンを作成し、鉛1mmの入ったクロスを張り効果を得た。約10カ月のデータから、線量は全員右下がりの傾向を示し、かなり減少の傾向を示している。セシウム134の減少によるものか、風、雨、雪等による影響か、微妙に空間線量の減少が見られる。

一方、内部被曝に関するデータも明らかになり、南相馬市立病院では、検査人数が、今年1月27日、現在で1万人を超え、色々なことが解ってきた。坪倉先生らの発表によると、昨年、9月10日の時点で、子供達の約半数が検出限界以下であったのに対して、今年の1月には、95%が検出限界以下であった。又、大人たちは10月に約半数であったものが1月には約80%に減少していた。

このことから、内部被曝もまた流動的で、絶えず排泄され続けており、消滅する過程にある。成人より、小児の排泄速度が極めて速く、男性より女性の排泄速度が速いことが、確認された。そして又、現在の南相馬での日常生活が、大きな内部被曝をもたらすものではないという事が証明され、いい情報であり、引き続き継続的な検査が必要である。再検査では値の下がり方が良い人と、悪い人がいることも分かった。ホットスポットが入り組んでいる南相馬、除染しながら環境改善が可能である。

ベラルーシのヘラルド研究所のデータによれば、内部被曝の94%が食べ物、5%が水、1%が空気とされており、内部被曝に重点を置いている。

外部被曝、内部被曝共に刻々と変化しており、早く追跡しないと貴重なデータは得られない事も判明した。流通の発達、供給店舗の発達及び信頼性、食料自給率の低さなどが幸いしたと言えるかもしれない。

いずれにしても、見えない敵に対して、ただ怯えるだけの国民、学者、官僚、意味不明の数値で規制している文部科学省、厚生省、

現場に素早く来て方法を考え、戦い、敵の正体を素早く究明する勇気と知性が問われるのではないだろうか。